

本トレンチでは配管そのものが検出され、層序は第4トレンチと同様すべて埋め戻し土である。よって、遺構・遺物は一切出土しなかった。よって本箇所も予定通り工事を施工した。

以上述べたように三箇所の工事区域のいずれにおいても、工事によって影響を受けるような遺構・遺物は出土しなかった。よって工事はすべて予定通り施工した。

(徳田 誠志)

四、出土遺物

今回の整備工事に伴う遺物は、狭木之寺間陵の墳丘裾から出土、もしくは事前に採集したもので、計一八点である。成務天皇陵の参道擬木柵改修工事に伴う掘削等、今回意図的に設けたトレンチからは出土品は認められなかった。これらの遺物は、すべてが埴輪の破片で、埴輪円筒片一五点、罎付埴輪片二点、不明品一点を数える(第29図)。いずれも小片で、器壁の摩耗が著しいため、調整手法等明確に示えない。灰褐色、もしくは淡茶褐色系の色調を呈する埴質の焼成を示す。また、胎土にやや多くの小々中砂粒や石英粒を含むという特色は、平成二年度に実施した今回の整備工事区域の事前調査や昭和六十年代に実施した外堤内法護岸工事区域の事前、立会調査時に出土した埴輪(本誌第三八号、第四三号参照)と基本的には同様の特徴を有するものである。

埴輪円筒には、厚手の製品(1)と薄手の製品(2)があり、その中間の数値を計るものもある。突帯をとどめる製品は、罎付埴輪片を含めても四点しかない。1を除く三点は概して突出度が高く、上辺下辺の撫

でつけの顕著なもの(2)、摩耗のため本来の形状をとどめていないものの(3)がある。1は幅広の突帯を有する製品である。径の復元は困難であるものの、曲面からみてかなりの大型品となる。従前の本陵出土品から考えると、楕形埴輪となることも考えられよう。2は一応胴部で径二四センチ前後に復元することができ、今まで知られている本陵出土品のなかでは、小型に属する。

3は罎付円筒埴輪かと思われ、罎の接合面とその他の沈線が一部認められる。罎に対応するかのように突帯の一部をカットしているが、通常罎付埴輪にこのような例は認められないことから、楕形等の形象埴輪となる可能性も指摘できよう。

4は大きく外反する形状をもつ製品である。天地、径ともに明らかにしないが、図のように復元できるとすれば、朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての部分に相当するのであろうか。内面は黒灰色を示す。

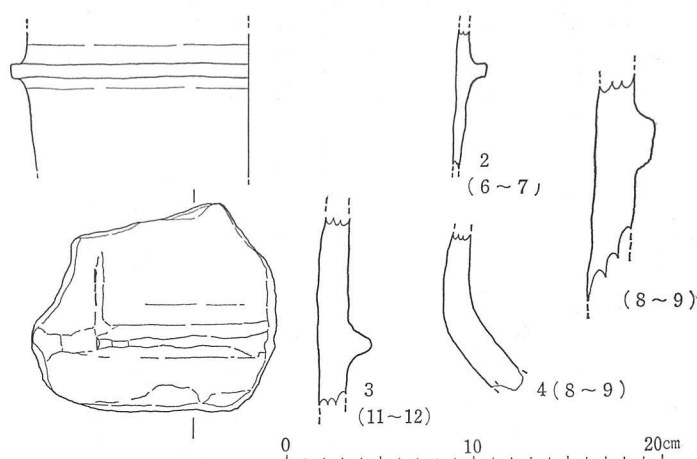
なお、出土品番号に付記している括弧内の数値は、平成二年度のトレンチ番号に対応している。

(福尾 正彦)

男狭穂塚陵墓参考地参拝所美化作業に伴う出土品

宮崎県のほぼ中央部を東西に流れる一ツ瀬川の流域には、多くの古墳群が知られている。西都原古墳群もその一つで、大正年間にわが国初の大規模な発掘調査が行われたことは、あまりにも著名である。男狭穂塚

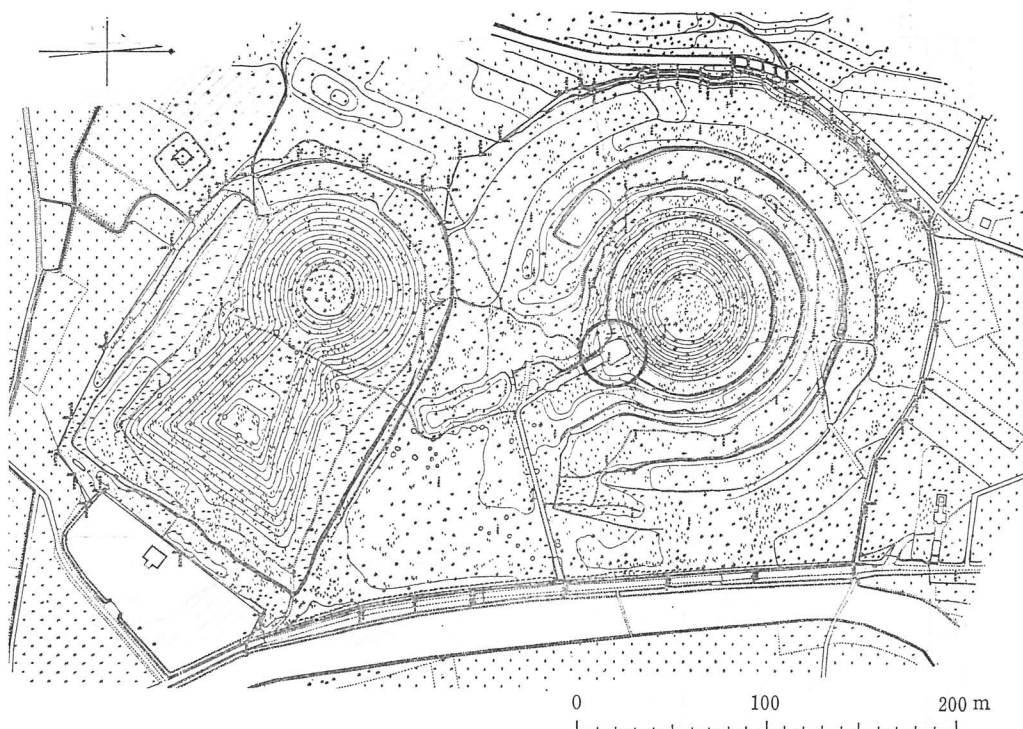
は女狭穂塚とならび、本古墳群中の盟主的存在である。その墳形については、明らかに後世の所産と思われる東南にのびる土壇状の土盛りを除けば、径一二メートル前後の円墳、もしくは東南にのびる張出し部をもつ帆立貝式の古墳とするのが妥当なところであろう（第30図）。この張出し部の基部付近は、かつて可愛塚神社が建っていたところで



第29図 狭木之寺間陵の出土品 (1/4)

あり、現在は男狭穂塚の参拝所として利用されている（第31図）。参拝所の東および西側は、この部分より約五〇センチほど高くなっている。そのうち、西側の段差のついた上の部分（第31図X）は、玉砂利等の混じった排出土でさらに盛り上がり、不整形な地表面をしていた。一方、その東側の段差の下の部分、つまり参拝所の西側部分（第31図Y）は、永年の風雨によって五〜一〇センチほど表土が流出していた。そこで、東側部分の盛り土を西側部分の表土として補う整地作業を、平成三年十二月二十一日に実施した。

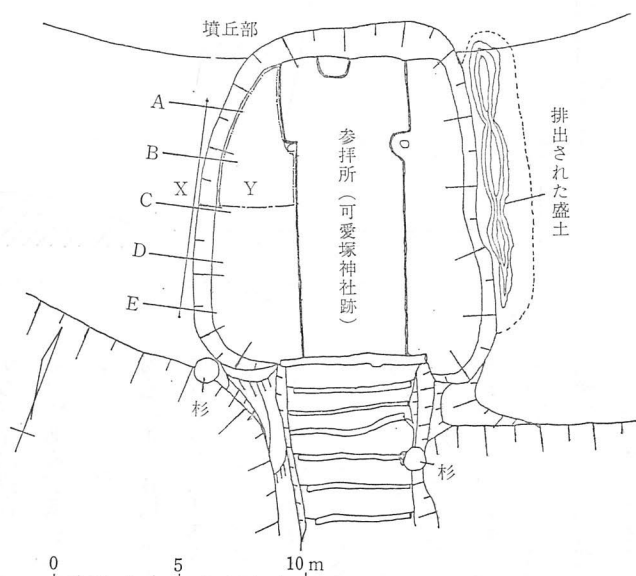
採土方法は、A地点（第32図、以下のアルファベットはすべて第32図中の記号）付近から草掻き用具によって掻き落とし、D地点付近までの特に目立って高い部分から採土した。この間、盛り土の高い地点は第31図の地表面から二〇〜二五センチ高くなっていた。作業中、B地点付近でカチッカチツと異様音を耳にし、遺物混入の可能性も考えられることから、作業を中断し、採土地と参拝所内に掻き落とした土を点検し、遺物の発見につとめた。しかし、土砂に混入していたものは黒色燻瓦片のみであり、作業を続行した。その後も異様音はあるものの、その原因は小石と黒色燻瓦片であった。ところが、C地点付近で盛り土の上部から陶磁器片二点と埴輪片一点が出土し、以後はより十分な注意をもって採土した。採土はD地点付近で終わり、最後の整地として突出土を掻き落とすときに、埴輪片三点、陶磁器片一点を同時に発見した。他の遺物は参拝所内に落とした土の中から検出した。これらの遺物はすべて第31図



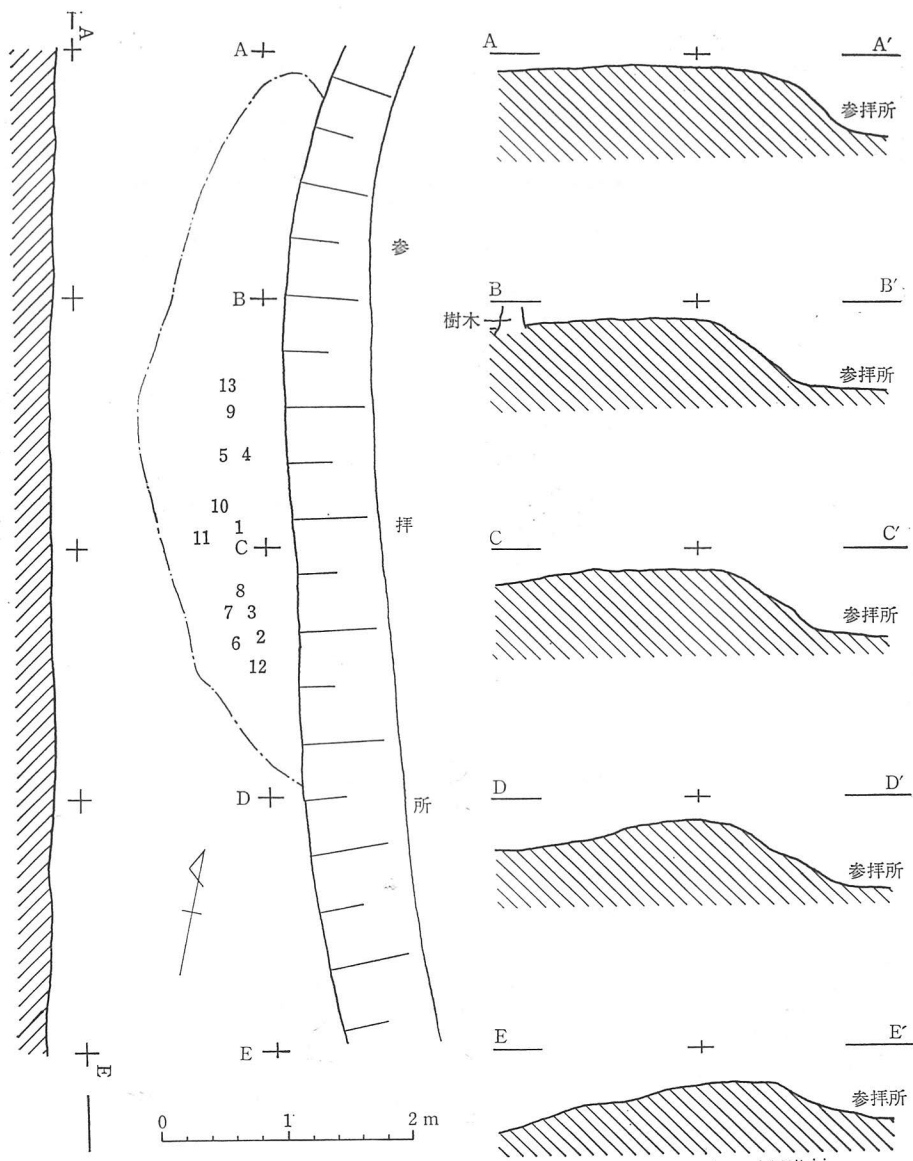
第30図 男狭穂塚陵墓参考地調査箇所(1) (○印部分) ($1/4000$)

X部分の盛り土上部に含まれていたものである。遺物の包含されていたと考えられる層位もまた、玉砂利等が混入した排出土であり、さらに埴輪片も陶磁器片や黒色燻瓦片と混在し、投棄されたような状態で散見され、原位置を保っているとは考えられないといえよう。

(緒方 吉信)



第31図 男狭穂塚陵墓参考地調査箇所(2) ($1/300$)



第32図 男狭穂塚陵墓参考地調査箇所的位置(3) (1/60)

今回の参拝所美化作業に伴う出土品は、一三点を数える。内訳は、埴輪片一〇点、陶器片一点、磁器片二点である。

埴輪 (第33図1~4)

埴輪円筒が九片、朝顔形埴輪が一片の計一〇片出土したが、うち三片は接合して一点となるものである。淡いベージュ色(1~3、A類)、もしくは淡黄褐色(4、B類)系の色調を呈するものと二種あるが、ともに内芯が黒灰色を示す点では共通する。黒斑は確認できないが、これが小片という大きさに起因するためかは明らかにはしえない。器壁の厚さはA類が一・五センチ前後、B類が一・〇センチ未満という具合に、色調に対応する関係を示している。A類の場合、胎土に多くの小々砂

粒などを含んでおり、それらが器表に露呈している。一方、B類は胎土が緻密で、砂粒などの含有量もA類に比べて少ない。A類は六片(四点)、B類は四片の出土である。

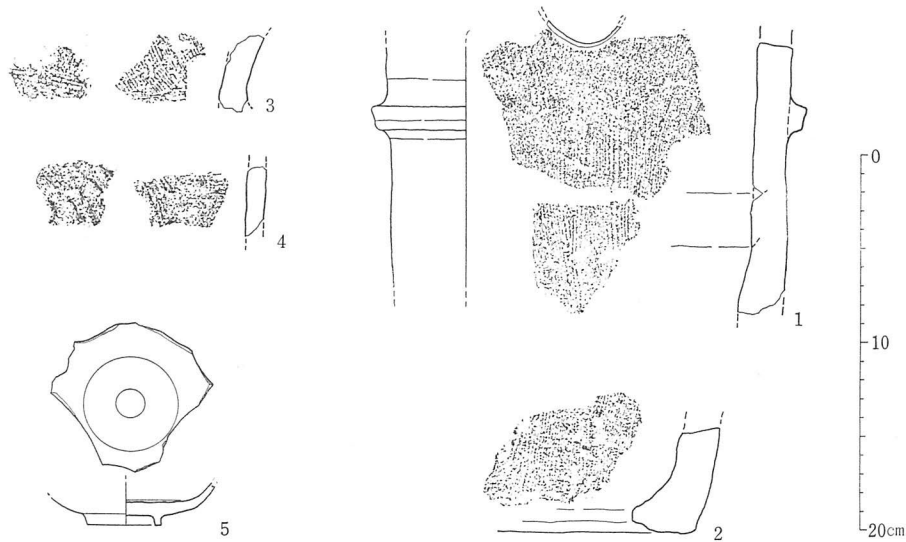
A類で外面調整を明らかにしえるものは、朝顔形埴輪の頸部(3)のみで、右下がり方向の斜め刷毛目が認められる。B類でも同様の調整を示すものがあるが、突帯の上部付近であるためか、横撫でを加えている(5)。また、B類には小片のため方向を明らかにしえないものの、撫でのみによって仕上げている製品がある。一方、内面はA類で縦方向の刷毛目(1・3)、もしくは朝顔形埴輪という器種の違いに基づくものか、横刷毛目に近い右上がりの斜め刷毛目(4)を認める。B類では、いずれも撫でによる仕上げである。径は1の胴部で約二一センチに、また、底部(2)で約三〇センチに復元される。他の破片では径を復元するのは困難である。透し孔も1で確認するかぎりにおいては、円形である。2では、底面付近が自重などによって内側に大きく張り出しているが、一部は外側にも張り出している。内面は比較的細かい縦刷毛目によって、砂粒が上方向に移動している。

陶器

緑と茶を白地に配した三彩の徳利、もしくは「からから」の頸部と思われる破片が一点出土している。薩摩焼であろう。

磁器(第33図5)

二点認められる。ともに碗であり、5には見込みに蛇ノ目釉ハギがお



第33図 男狭穂塚陵墓参考地の出土品 (1/4)

こなわれている。畳付は無釉である。他の一点も淡いコバルトブルーの染付の碗である。

従来、男狭穂塚から確実に出土したという埴輪は知られていなかった。今回の埴輪が男狭穂塚に確実に伴うとすれば、そのもつ意義は少ないといえよう。また、埴輪のうち、A類は女狭穂塚やその陪冢とされる一六九号〜一七〇号出土品と、色調焼成胎土など同様の特色を有するが、B類は現在、女狭穂塚においてはその存在が知られていないものである。今後は各類の埴輪が、西都原古墳群においてどのように使用されているかの追及も必要とされるであろう。一方、出土した陶磁器は、一八世紀以降の製品であり、埴輪と混在したかたちでの出土状況と併せて、かつてここに鎮座したという可愛塚神社と密接な関係をもつものとも考えられよう。

(福尾 正彦)